

伝光録の成立 (一)

東 隆 眞

目 次

- 一、はじめに
- 二、『伝光録』の組織、構成、趣旨
- 三、『伝光録』の書名、提唱者と編録者、提唱の時期、場所

一、はじめに

『伝光録』は、曹洞宗高祖道元禪師（一二〇〇—一二五三）第四世の法孫で、曹洞宗太祖と並称されている瑩山紹瑾禪師（一二六八—一三二五）が、正安二年（一三〇〇）正月十一日からおそらく同三年にかけて加州押野荘野々市外守の大乗寺（現在は石川県金沢市長坂町に移転）で、その会下の参学者に提唱した説法を、侍者が編録したものと伝えられている。すなわち、その意味において、『伝光録』は、瑩山紹瑾禪師の語録である。『伝光録』は、道元禪師の『正法眼蔵』とともに、曹洞

宗の二大宗典として尊重され学道の指南書となっているが、そのみにとどまらず、日本仏教史のうえでも、他に類例をみない独自の性格と内容をそなえた禪の語録である。

瑩山紹瑾禪師の行歴については、既に拙著『瑩山禪師の研究』（昭和四九年四月、春秋社刊）において、能う限り解明したつもりであるから、ここで重述することは避けるが、それにしても、瑩山紹瑾禪師伝に関する文献は、必ずしも多数残っているとは言えないし、現存するそれらの諸資料の文献性についての吟味は、今後も継続的に行われなければならないのである。なканずく、瑩山紹瑾禪師の代表的語録ないし主著として位置づけられている『伝光録』の成立については、その原本が散佚

している現在、諸写本をもとに検討を加えてみなければならぬ点が多い。

『伝光録』が最初に開板されて、宗門一般に流布される魁となったのは、実に瑩山紹瑾禪師が遷化して四三二年後、即ち安政四年（一八五七）九月二二日、近江（滋賀県彦根市）清涼寺の仏洲仙英和尚（一七九四～一八六四）が、『瑩山和尚伝光録』二冊本として、京都柳枝軒から印行したことによってである。⁽¹⁾しかし、この仙英本『伝光録』は、『伝光録』の原型に必らずしも忠実ではない。（拙論「仙英和尚開板本『伝光録』の底本について」『宗学研究』第一〇号）

その後、ようやく『伝光録』が広く宗侶によって参究され、宗学者の研究対象となり、さまざまな角度から照明を当てられて現今に至っているが、しかし、必らずしも『伝光録』の成立に関する諸問題が解明し尽されたとは言えないのである。

その理由はいろいろあるが、最も大きな事情のひとつは、その後、『伝光録』の新出写本が、全国各地の諸寺院から続々と登場したため、『伝光録』に関する参学研究の基本的条件が変化してきているからである。

最初、安政四年（一八五七）『瑩山和尚伝光録』を開板するにあたり、仏洲仙英和尚が過去数十年間にわたって探索し蒐集した写本は、旅僧の所持する五冊本、能登・永光寺本、加賀・大乘寺本、無隠道費の序文がある写本などそのほか数本を校讎したと、その「凡例」に述べている。次に、昭和十五年（一九四〇）、『異文対準
出典追考 伝光録詳解』（仏教社刊）を著わした横関了胤老師は、その「解説」において、大乘寺本、永光寺本、

松山寺本、当闡本などを挙げている。けだし、横関老師は、写本としては、大乘寺本をのぞく三本を披見したにとどまるのであろう。次に、昭和四十年（一九六五）、永久岳水博士は、『伝光録物語』（鴻盟社刊）を上梓したが、その「序」で、「十種の騰写本伝光録を拝閲」したと述懐し、同書に「第四篇 伝光録騰写本の種類」を設けて、一四種写本の紹介を略述している。しかし、披見したのは、「十本」であると述べている。

『伝光録』写本の出現は、かの『正法眼蔵』現存写本が三〇〇種にのぼるといわれている現況と比較してすこぶる僅少である。ちなみに、永久博士の苦辛譚を紹介しておくと、博士は、「伝光録を探し求め始めてから最初の三十年間に於ては、孤峰禪師の法愛に依りて、永光寺本伝光録と松山寺本伝光録との二本を拝閲することが出来たのが唯一の法運であって、何処の宗門寺院の法蔵に伝光録が秘蔵されているのか、其の手がかりが一つも無く、仏教書肆の店頭に於ては、四十年間ほどは一度も拝することが出来なかった。」（永久岳水著『伝光録物語』一二九頁）と言っている。推して知るべしである。しかし、昭和四十年に、曹洞宗宗務庁に曹洞宗全書刊行会が設けられ、全国宗門寺院が所蔵する関係文書の調査を開始する一方、かねて『伝光録』写本を各方面に探索していた私のもとにも新しい情報が寄せられ、現在では、二十一種の写本が、その存在を確認されているのである。この二十一種の写本のなかには、仏洲仙英和尚もおそらく披閲しなかったであろう現存最古写本（室町期書写）の乾坤院本（拙著『乾坤院本伝光録』参照。昭和四五年、隣人社刊）も含まれている。換言すれば、今日の段階では、『伝光録』の写本は質、量と

もに、過去を凌駕し、今後の研究に新しい資料と視野を提供することとなったのである。もっとも、『伝光録』写本が二十一種に増加したからと言って、その本文内容や伝写系統が前来の諸写本と根本的な差異点をもっているのではないし、私の予想では、『伝光録』写本は、今後も陸續と新出されることが十分に確信されるのであるから、固定的判断はさしひかえなければならぬが、いずれにせよ、今後、『伝光録』の成立については、二十一種写本を基礎資料として、点検しなければならないのである。

註(1) 『伝光録』の最初の開板が、瑩山禪師(一二六七—一三二五)遷化後四三二年を経た安政四年(一八五七)であったということが、『伝光録』の成立に、一つの暗点を投げかけている向きも、曾って是在った。

しかし、たとえば、道元禪師(一二〇〇—一二五三)の『正法眼蔵』にしても、その最初の大々の開板は、道元禪師遷化後、五五五年を経た文化五年(一八〇八)年、玄透即中(一一八〇七)によってであったし、一方、『正法眼蔵』の道元禪師偽撰説を唱える独庵玄光(一六三〇—一六九八)石雲融仙(一六七七—)、無閑瑞門、天桂伝尊(一六四八—一七三五)らも登場し、その成立については、現在もくすぶりつづけて、明確になってはいないのである。また、『正法眼蔵随聞記』にしても、その現在最古写本・長野県大安寺本(零本)が一般に公開されたのは、道元禪師遷化後七二六年、懷弊禪師滅後七〇〇年を経た昭和四四年(一九七九)刊行された拙著『五写本正法眼蔵随聞記』(圭文社刊)によってである。

このようなことは、宗門の古文書資料出現にあたって、しばしばみられる事情である。

『伝光録』が、約五世紀後に初めて印刷されたことから、『伝光録』は江戸期に成立した偽書であるとか、仏洲仙英が捏造したとか憶測されていたことがあったのは、まさに過去における一部の邪推であって、今日となっては粗漫な見解というべく、まったく問題にならない。

ただ、仙英本『伝光録』は、仙英和尚の善意から成る辛苦の割註、改文添文などが、後世、かえって『伝光録』成立に疑義を抱かしめる原因を招いたのは、仙英和尚の予想しないところではあったろうが、すこぶる遺憾なところである。

二、『伝光録』の組織、構成、趣旨

まずはじめに、『伝光録』とは何ぞや、即ち、『伝光録』の組織、構成、趣旨について、略説しておかなければならない。

『伝光録』の組織は、全五十三章から成り立っている。その五十三章を、現存最古の写本である愛知県乾坤院の蔵本(二冊本)にもとずいて列挙すると、次のとおりである。

(マテ) 偏卷

- 第一章 釈迦牟尼仏
- 第二章 第一祖摩訶迦葉尊者
- 第三章 第二祖阿難陀尊者

第四章	第三祖商那和修尊者
第五章	第四祖優婆崛多尊者
第六章	第五祖提多迦尊者
第七章	第六祖弥遮迦尊者
第八章	第七祖婆須密多尊者
第九章	第八祖仏陀難提尊者
第一〇章	第九祖伏駄密多尊者
第十一章	第十祖脇尊者
第十二章	第十一祖富那夜奢尊者
第十三章	第十二祖馬鳴尊者
第十四章	第十三祖迦毘摩羅尊者
第十五章	第十四祖竜樹尊者
第十六章	第十五祖迦那提婆尊者
第十七章	第十六祖羅睺羅多尊者
第十八章	第十七祖僧伽難提尊者
第十九章	第十八祖伽耶舍多尊者
第二〇章	第十九祖鳩摩羅多尊者
第二一章	第二十祖闍夜多尊者
第二二章	第二十一祖婆須盤頭尊者

正卷

第二三章	第二十二祖摩拏羅尊者
第二四章	第二十三祖鶴勒那尊者

第二五章	第二十四祖獅子尊者
第二六章	第二十五祖婆舍斯多尊者
第二七章	第二十六祖不如密多尊者
第二八章	第二十七祖般若多羅尊者
第二九章	第二十八祖菩提達磨尊者
第三〇章	第二十九祖大師
第三一章	第三十祖鑑智大師
第三二章	第三十一祖大医禪師
第三三章	第三十二祖大滿禪師
第三四章	第三十三祖大鑑禪師
第三五章	第三十四祖弘濟大師
第三六章	第三十五祖無際大師
第三七章	第三十六祖弘道大師
第三八章	第三十七祖雲岩無住大師
第三九章	第三十八祖洞山悟本大師
第四〇章	第三十九祖雲居弘覺大師
第四一章	第四十祖同安丕禪師
第四二章	第四十一祖後同安大師
第四三章	第四十二祖梁山和尚
第四四章	第四十三祖大陽明安大師
第四五章	第四十四祖投子山青和尚
第四六章	第四十五祖芙蓉山楷禪師

第七章 第四十六祖雪峰淳和尚
 第八章 第四十七祖悟空禪師
 第九章 第四十八祖天童ノ珙和尚
 第五〇章 第四十九祖雪豆ノ鑑和尚
 第一章 第五十祖天童浄和尚
 第二章 第五十一祖永平元和尚
 第三章 第五十二祖永平肇和尚

右によって明らかなとおり、付法の根源としての釈迦牟尼仏を巻頭の第一章におき、第二章に第一祖摩訶迦葉尊者を掲げ、以下第二十九章に第二十八祖菩提達磨尊者を挙げ、第一祖から第二十八祖のいわゆる西天二十八祖は尊者の敬称で統一している。第三十章の第二十九祖大師（慧可）から第三十四章の第卅三祖大鑑禪師（慧能）、第三十九章の第卅八祖洞山悟本大師（洞山良价）、第五十一章の第五十祖天童浄和尚、第五十二章の第五十一祖永平元和尚、第五十三章の永平肇和尚まで、東土日本の曹洞宗の法系につらなる二十四祖を、歴代嗣法の次第によって、一祖師も洩らさず列挙し、大師、和尚の敬称をもって提示している。即ち、釈迦牟尼仏から第五十二祖永平懷肇に至る一仏五十二祖について、全五十三章の組織によって成り立っている。

次に、『伝光録』の各章の構成についてであるが、各章は、本則、機縁、提唱、頌古の順序で、この四部から成る。本則とは、その章の主題であり、機縁とは、その章に登場する祖師の行業ならびに本則のもとと

なった祖師の悟道の由来を示した部分であり、提唱とは、本則ないし機縁についての瑩山禪師の解説ならびに参学者に向けての激励であり、頌古とは、結びの詩である。

『伝光録』の各章は、この四部分から構成されていると見なしうるとして便宜的に区分したのは、昭和十五年に刊行された横関了胤老師の『異文対挙 伝光録詳解』が、最初である。次いで、昭和三十一年に訂正増補して再版発行された孤峯智瑱禪師の『冠註伝光録』は、おそらく横関説を採用してであろう、やはり本則、機縁、拈提、頌古としている。更に次いで、昭和四十年、永久岳水博士も、『伝光録物語』において、悟則、機縁、宗要・拈提、偈頌・結句としている。

横関老師の以前は、仏洲仙英和尚の開板本は無論のこと、従前のいずれの写本にも見られなかったものであり、横関老師以後、孤峯禪師、永久博士など斯道の大家も、用語の相違は多少あるとは言え、いずれも基本的には横関老師の構成区分に依っているように、横関老師の試みは、各章の本文内容に徴して、甚だ当を得ていると思われるのである。参考までに、『異文対挙 伝光録詳解』の釈迦牟尼仏の章を引いてみると、

【本則】 釈迦牟尼仏……同時成道

【機縁】 それ釈迦牟尼仏は、西天の日種姓なり。……たとひ四十九年、三百六十余会、指説すること異なりといへども、種々因縁、譬諭言説、この道理をすぎず。

【提唱】 いはゆる我といふは釈迦牟尼仏にあらず……山僧また、この一則下に卑語をつけんことをおもふ。諸人要レヌヤ聞レト麼。

「頌古」 一枝秀出……築著来。

ということである。横関老師の五十三章の各章における本則、機縁、提唱、頌古の四部分の具体的区切りが、悉く全て妥当な判断であるかどうかについては、あるいは異論があるにしても、少くとも、右の四部分の区分法そのものは、そのまま採用すべきであろうと思われる。

次に、『伝光録』の趣旨について考察してみよう。

この点について、『伝光録』の本文は、改めて説明していないが、仏洲仙英和尚は、『瑩山和尚伝光録』を上梓し、その「凡例」において、
一、コノ録、初ノ迦文仏ノ章ヨリ終リノ孤雲祖ノ章マデ、悉ク章章不昧光光無碍ニシテ、仏仏祖祖ノ身心頂相、皮肉骨髓ナリ

と述べている。これは、『伝光録』は、釈迦牟尼仏から永平懷弊和尚までの一仏五十二祖の悟道と付法の次第を説いたものとして押さえているのであろう。しかし、思うに、『伝光録』の趣旨は、右にとどまるのではない。即ち、『伝光録』は、第一に悟道の本質を明らかにし、第二に付法の根源を明らかにし、第三にその付法の次第を明らかにし、第四に修行の具体的な要点を明らかにし、第五にそのために修行者の奮起を促しているのである。

たとえば、このことを釈迦牟尼仏の章（便宜上、横関本による）によってみれば、第一の点は、「釈迦牟尼仏、見明星悟道曰、我与大地有情同時成道」の「我与大地有情同時成道」がこれに相当し、第二の点は、「正法眼蔵を摩訶迦葉に付嘱す。流传して今におよぶ。実に梵漢和の三国に流传して正法修行すること、これをもて根本とす。かの一期の行状

をもて遺弟の表準たり」とある、この「正法眼蔵」と、その「正法眼蔵」が現実に具体化する釈迦牟尼仏の「一期の行状」がこれに相当し、第三の点は、全五十三章における釈迦牟尼仏から永平懷弊和尚までの一仏五十二祖の付法の次第がこれに相当し、第四の点は、「成道の道理、親切に会せんとおもはば、瞿曇、諸人、一時に払却してはやく我なることを知るべし。我の与なる、大地有情なり。与の我なる、これ瞿曇老漢にあらず。子細に点検し子細に商量して、我をあきらめ与をしるべし。たとひ我をあきらめたりといふとも、与をあきらめずんば、また一隻眼を失す。然りといへども、我と与と一般にあらず、両般にあらず、正に汝等の皮肉骨髓、ことごとく与なり。屋裏の主人公、これ我なり。皮肉骨髓を帶せず、四大五蘊を帶せず、畢竟していはば、欲^{レハ}識^ニ庵中不死ノ人^ヲ豈^ニ雜^ニ而今^イ這^ニ皮袋^ニ」の「屋裏の主人公」たる「我」を明めることがこれに相当し、第五の点は、「しかあれば、横参堅参し七通八達して。まさに瞿曇の悟処をあきらめ自己の成道を会すべく。恁麼の公案、子細に見得し一一に胸襟より流出して前仏及び今時の人の語句をからず、次の請益の日をもて下語説道理すべし」がこれに相当するであろう。『伝光録』全五十三章の各章は、このような趣旨で、それぞれ一貫しているのである。

三、『伝光録』の書名、提唱者と編録者、提唱の時期、場所

『伝光録』の書名、提唱者および編録者、提唱の時期、場所などについて、後に紹介する『伝光録』二十一種の写本によって、『伝光録』自身

の記すところを、ここに掲げてみよう。

まず、『伝光録』の書名についてであるが、その該当個所の巻頭に示される内題について、二十一種写本を成立年代順に列挙してみると、

乾坤院本（一四三〇—一四五九年写）

紹瑾大和尚住能州洞谷山永光寺語録 侍者編

師於正安二年正月十一日始請益

竜門寺本（一五四七年写）

紹瑾大禪師住能洞谷山永光寺語録 侍者編

於正安二年正月十一日始請益

松山寺本（一五九九—一六二七年写）

紹瑾大和尚住能州洞谷山永光寺語録 侍者等編

師於正安二年正月十一日始請益

長円寺本（一六三七年写）

紹瑾大和尚住能州洞谷山永光寺語録 侍者編

師於正安二年正月十一日始請益

天林寺本（一六九六年？写）

紹瑾大和尚住能州洞谷山永光寺語録

師於正安二年正月十一日始請益 侍者編

永光寺本（一七一五年写）

紹瑾大禪師住能州洞谷山永光寺語録

師於正安二年正月十一日始請益 侍者編

瑞泉寺本（一七四五年写）

瑩山和尚伝光録 侍者編

師於正安二年正月十一日始垂示

永平寺本（一七四六年写）

大乘二世瑩山紹瑾大和尚伝光録

師於正安二年正月十一日始請益 侍者編

永久本（一七四七年写）

大乘二世瑩山紹瑾大和尚伝光録卷之七

師於正安二年正月十一日始請益侍者編

山端本（一七五八年写）

瑩山和尚 伝光録

正安二年正月拾一日始請益

河村本（一七六七年写）

大乘二世瑩山紹瑾大和尚伝光録卷之一

師於正安二年正月十一日始請益 侍者編

永昌院本（一七六七年写）

瑩山和尚伝光録卷之七

師於正安二年正月十一日 始_二請益_一

東本（一七九三—一八〇五年写）

瑩山和尚伝光録 （侍者編なし）

師於正安二年正月十二_{（註当初は一であつたが後人が二に改めた痕跡が濃厚である）}日 始_二請益_一

大昌寺本（一七九五年写）

大乘二世瑩山紹瑾大和尚伝光録卷之一

師於正安二年正月十日始_二請益_一 侍者編

可睡齋本（一八四五年写）

瑩山和尚伝光録

法正寺本（一八七二年写）

瑩山和尚伝光録

師於正安二年正月十一日始請益

東漸寺本（一八八六年写）

瑩山和尚伝光録

師於正安二年正月十一日始請益

松下本（以下、書写年時不詳）

瑩山和尚伝光録卷之一 侍者編

師於正安二年正月十一日 始_二請益_一

導故寺本

瑩山和尚伝光録第一

師於正安二年正月十一日始請益

松源寺本

瑩山和尚伝光録

浄空院本

瑩山和尚伝光録 侍者編

於正安二年正月十一日始請益

のとおりである。

第一に書名についてであるが、はじめ、乾坤院本、竜門寺本、松山寺本、長円寺本、天林寺本、永光寺本の六本は、「紹瑾大和尚（または大

禪師。なお、瑩山は道号、紹瑾は諱。拙論「瑩山禪師の号と諱」参照）住能州洞谷山永光寺語録」となっており、その後は、瑞泉寺本をはじめとする「瑩山和尚伝光録」（山端本、永昌院本、東本、可睡齋本、法正寺本、東漸寺本、松下本、導故寺本、松源寺本、浄空院本）が十一本、「大乘二世瑩山紹瑾大和尚伝光録」が永平寺本をはじめとする（永久本、河村本、大昌寺本）の四本である。

これによってみれば、本書の書名には、三期の、大別すれば二期の変遷が窺われるのである。即ち、第一期は要するに、「洞谷山永光寺語録」第二期は「伝光録」、第三期は「大乘二世」の「伝光録」であり、約して言えば、「永光寺語録」と「伝光録」である。『伝光録』の初見は、瑞泉寺本であるが、瑞泉寺本はいかなる祖本にもとずいて『伝光録』と書写したのかは、現段階では知る術もない。また、『伝光録』の書名は、もともと瑩山禪師の命名ではあるまいかと推量する向き（永久岳水博士『伝光録物語』）があるが、そうかも知れないし、或いはそうではないかも知れない。

乾坤院本以下、竜門寺本、松山寺本、長円寺本、天林寺本、永光寺本など、前代の諸写本は「紹瑾大和尚（または大禪師）住能州洞谷山永光寺語録」という共通した内題で伝写されてきているのに、瑞泉寺本に至って、突如、「瑩山和尚伝光録」の内題に変化したのか。この間を連結する線は、この内題をいくら擬視しても出てくるものではない。

因みに、外題の題象をみると、乾坤院本から法正寺本まで、一、二の差異はあるが、要するに、「瑩山」「伝光録」となっている。だから、外

題の題象からみる限り、当初から「瑩山伝光録」であったかも知れないと予想されるが、しかし、いったい題象の表記は、往々にして、改装、修覆の際、後人によって改められる可能性が、内題に比較して大でありうる。したがって、外題だけをとりあげて、本書の書名について論断することも、また危険であるといわねばならない。

このようなわけで、『伝光録』という書名が瑩山禪師の命名に発するものかどうかは即決することができない現状である。しかし、やがて後述するとおり、「永光寺語録」の書名はその提唱時期からしても不適當であり、二十一種写本の十五種が冠する『伝光録』が適切な書名であることは、すでに明らかにした本書の趣旨からみても歴然たるものがある。

次に、提唱者であるが、右の二十一種写本の第一冊巻頭に出ている内題に、「紹瑾大和尚」ないし「紹瑾大禪師」の「語録」あるいは「瑩山和尚」の「伝光録」で共通しているから、これに依る限り、瑩山紹瑾禪師その人である。

しかし、更に、本文内容を検討するに、直接に瑩山紹瑾禪師の名を摘出することはできないのである。これは、そもそも『伝光録』が提唱者自身の筆録、撰述ではないことを意味することになるのであるけれども逆に言えば、この点において、『伝光録』瑩山禪師説を積極的に立証できない憾みを残しているのである。しかしながら、本文を更に仔細に検討するとき、『伝光録』の提唱者が瑩山紹瑾禪師であることを直接に決定づける個所がある。

それは、第五十三章「第五二祖永平牒和尚」の章である。即ち、

予^ヨ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ

とある個所である。いま右の文章は乾坤院本を掲げたのであるが、このほかの諸本では、

(浄空院本《零本》)

予^ヨ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (竜門寺本)

予^ヨ二代和尚ノ尋常垂示ヲ聞シ (松山寺本)

予^ヨ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (長円寺本)

予^ヨ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (天林寺本)

予^ヨ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (永光寺本)

(瑞泉寺本《零本》)

予^ヨ二代和尚尋常ノ垂示ヲ聞シ (永平寺本)

予^ヨ二代、瑩山和尚・尋常ノ垂示ヲ聞シ (永久本)

予^ヨ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (山端本)

予^ヨ二代和尚尋常ノ垂示ヲ聞シ (河村本)

予^ヨ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (永昌院本)

予^ヨレ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (東本)

予^ヨ瑩山二代和尚尋常ノ垂示ヲ聞シ (大昌寺本)

予^ヨ懷葵和尚^ニ戒於年久^ニ 二代和尚尋常ノ垂示ヲ聞シ (可睡齋本)

予^ヨ瑩山和尚^ニ奉侍年久^ニ 二代和尚尋常ノ垂示ヲ聞シ (法正寺本)

予^ヨ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (東漸寺本)

予^ヨ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (松下本)

予^ヨレ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (導故寺本)

予^ヨ二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲ聞シ (松源寺本)

となっているのである。

仏洲仙英和尚の『瑩山和尚伝光録』開板(安政四年・一八五七)後に書写された法正寺本(明治五年・一八七二)、東漸寺本(明治十九年・一八八六)は除外するとして(ただし可睡齋本は仙英開板にさかのぼること一二年の弘化二年(一八四五)の書写年時をもつが、これは書写者の智賢が開板前の仙英本の原稿を書写したか、あるいは、むしろ仙英が参考資料とした写本を智賢が筆写したとも推定される。いずれにせよ、仙英と智賢は同時代の人物であるから、その人的交流関係の実態が問われる)、その他の写本は、「予^ヨ」は、「予^ヱ」、「吾^ミ」で共通しており、同一筆写人もしくは後人の筆蹟で、その右横に傍註が、「瑩山也」(松山寺本)、「瑩山」(永平寺本、河村本)「瑩山和尚」(永光寺本)などと添えてあるのである。瑩山禅師以外の名前は全く記入されていないのである。この「予^ヨ」と自称する人物が『伝光録』の提唱者であるが、「予^ヨ」は、「二代」即ち永平寺第二代懷弊つまり「第五十二祖永平弊和尚」に師事して、曾つての尋常の垂示を耳底に留めていたわけである。とすれば、「予^ヨ」は懷弊の門下ということになるが、懷弊の嗣法の門人は、義介、義尹(?)、寂円、仏僧、義演ら、五員が伝わっており、なかでも懷弊にもっとも永く隨身し、永平寺第三代となった義介がその長嫡である。また「末後小師」(『洞谷記』)に瑩山禅師がいる。したがって、義介かその法嗣瑩山紹瑾禅師のいずれかを意味する。しかし、「第五十二祖永平弊和尚」章に、

当寺老和尚价公マノアタリ彼嫡子トシテ法幢ヲ此処ニ立テ宗風ヲ当林

ニ挙ク(乾坤院本)

とある。「当寺」とは後に触れることになるが、義介の開創した加州・大乘寺を指し、「老和尚价公」とは東堂(隠居)的立場にあった義介を敬称しているのであるから、その義介が、自らを指して「老和尚价公」と称するわけがない。結局、「予」とは瑩山禅師以外の人ではないことになる。

瑩山紹瑾禅師は、その『洞谷記』によると、

八歳にして剃髪し、永平当住義介和尚の会に参ず。十三歳にして僧と作る。永平二代先師辨和尚の末後の小師と為る(原漢文)

とある。これは、建治元年(一二七五)八歳から弘安元年(一二八〇)十三歳までの年少時を僅か五年の期間ではあるが、懷弊に師事しことを意味するのである。けれども、懷弊二十一回忌辰に相当する正安二年から『伝光録』を開演して、日本曹洞宗で最初に懷弊の行履を顕彰し、延慶三年(一二三〇)義介が遷化した翌年に、大乘寺に道元禅師、懷弊、義介の永平寺三代尊の靈骨を大乘寺開山塔に奉安し、元亨三年(一二三三)能登の永光寺に如浄、道元禅師、懷弊、義介、瑩山の五老峯を築造し、あわせて『洞谷伝燈院五老悟則并行業略記』を撰述している。瑩山禅師の嗣法の本師は義介であることは言うを俟たないが、瑩山禅師にとって、懷弊は義介と同様に本師に等しい存在であった。『洞谷記』の祖師忌には、先師(義介を指す)忌、師翁(懷弊を指す)忌、一如也とあり、

雖レ不ニ先師、師翁如レ遇ニ当寺開山忌一

とあり、

また、正中二年(一二三五)五月二四日の項には、

同廿四日、先師辨和尚、月忌諷經

とある。義介も懷弊も一如であり、懷弊の忌日には開山忌とおなじく丁重に執行しなければならないことを強調して、懷弊を亡くなった本師つまり「先師」として仰いでいるのである。年少時の短期間であったとはいえ、いかに懷弊が瑩山禅師に決定的な宗教的感化を及ぼしているか容易に理解されるであろう。まことに、宗教生活というものは、年齢や期間の長短で決められるものではない面があるのである。

次に、編録者であるが、先に列挙した第一冊の巻頭で一目瞭然のとおりに、編録者を明記しない写本もあるが、初期の写本には、「侍者編」(松山寺本のみ「侍者等編」とする)と出ているから、その限りにおいて、『伝光録』は、提唱者瑩山禅師の垂示を、その侍者が、原初は速記録に記録した。つまり「聞書」きしたのである。

一般に、『伝光録』は、瑩山禅師の撰述したものと誤解している向きが多いが、『伝光録』は、かりに、瑩山禅師の備忘録があったにせよ、決して道元禅師の『正法眼蔵』のように、自ら筆を染めて著わした撰述ではなく、実に侍者の聞書なのである。この点の無理解が、また『伝光録』瑩山禅師偽撰説へと短絡せしめる結果を招いているのである。

さて、しからば、いま侍者とは単数が複数か、具体的には誰を指すのか。このことをここで断定する資料はもちあわせていないが、できるだ

け肉迫してみると、次のようであろう。

瑩山禪師のもとに参じた老若男女の門人は、おおよそ六五名の人名が記録に残っており（拙著『瑩山禪師の研究』）、そのうち瑩山禪師にとつて主だった弟子は、明峯素哲（一二七七—一三五〇）、無涯知（智）洪、（———一三五二）義山韶碩（一二七六—一三六六）、壺庵至簡、孤峯覚明（一二七一—一三六一）、珍山源照、など、いわゆる「四門人六兄弟」（『洞谷記』）の実数六人であり、その二大神足として明峯素哲と、義山韶碩の二員がいる。

永仁三年（一二九五）二八歳、阿波の城万（満）寺を創めて、この冬、最初の戒法を開き、眼可鉄鏡（———一三二一寂）ほか五名を度し、同六年（一二九八）までに七十余人を接化し、正安元年（一二二九）三十二歳、加州・大乘寺義介の許に帰り、義介の法を嗣いで、その長嫡となり、大乘寺における最初の半座となった瑩山禪師は、翌正安二年（一三〇〇）正月十一日より『伝光録』の提唱をはじめたのであった。このころ、瑩山禪師の侍者としては、眼可鉄鏡、明峯素哲、義山韶碩の三名がその可能性がある。

眼可鉄鏡は、永仁四年（一二九五）、城万寺瑩山禪師の最初の得戒の弟子であり、城万寺最初の首座であり、正安元年（一二九八）、やがて瑩山禪師に随伴して大乘寺に帰り、延慶二年（一三〇九）義介が遷化したとき大乘寺の最初の首座となり、のち永光寺の草創のときもその首座に任じられ、更にまた瑩山禪師によって浄住寺の西堂を命ぜられ（『洞谷記』）、終始一貫して、瑩山禪師の身邊を離れず、禪師に重用され、元亨元年

（一三二二）正月二十八日、永光寺で遷化した。四門人六兄弟のうち、その第二番、無涯智（知）洪は、もと鉄鏡に受業した人であり、珍山源照も、鉄鏡の遺状にもとずいて禪師から印可を受けているところをみると、やはり、はじめ鉄鏡の弟子であったのではないかと思われる。

明峯素哲は、四門人六兄弟の筆頭であり、大乘寺にいた瑩山禪師のもとに参じ、その侍者となって八個年を過ごし、師席を襲って永光寺第二世、大乘寺第三代となった。義山韶碩と並ぶ瑩山門下の双壁である。元亨三年（一三二三）六月二五日の年記をもつ瑩山禪師の『明峯禪師立僧普説』によると、「吾首座哲明峯、当仁不可譲、三十年同宿、二十二年法嗣、当初在大乗、偽侍者八箇年」とある。これによれば、明峯が、義介の下で、瑩山禪師とともに、大乘寺で修行したのは、元亨三年から三十年以前の永仁二年（一二九四）瑩山禪師二十七歳の前後であり、その後明峯が瑩山禪師の法嗣となった乾元元年（一三〇二）瑩山禪師三十五歳までの八年間は、大乘寺瑩山禪師のもとで侍者を勤めていたことを、瑩山禪師が表明しているのである。

義山韶碩は、四門人六兄弟の第三席である。この人が、瑩山禪師に相見の礼をとった時期、場所については異説があつて明確ではないが、元亨四年（一三二四）七月七日の『義山禪師請状』によれば、瑩山禪師は「義山老者、予三十年同宿」と記している。元亨四年から三十年をさかのぼると永仁三年（一二九五）ということになり、明峯より一年後れとなる。義山は、永光寺の首座となり、総持寺第二代、永光寺第四世（のち再住）ともなっている。

これら眼可鉄鏡、明峯素哲、叡山韶碩ら三人は、いずれも瑩山禪師の最も信頼する門人であり、『伝光録』提唱の講座にも列席したにちがいないのであろうが、鉄鏡は、瑩山禪師の鉄鏡に対する処遇から推察するに瑩山禪師が一目置いていた人物であると思われ、また、叡山は瑩山禪師の侍者となったことも十分に考えられるけれども、そのことを明記する記録がない限りは、大乘寺で八個年にわたる侍者を勤め、「哲侍者」、「哲侍者」と愛称されていた明峯素哲こそ、『伝光録』を編んだ「侍者」に相当すると言わねばならない。

ところで、禅院における侍者は、要するに、住持に侍して、その身の世話をする僧のことで、役職が分掌されて、正式には、焼香侍者、書状侍者、請客侍者、衣鉢侍者、湯薬侍者、聖僧侍者があり、これを堂頭住持の五侍者と称する。即ち、住持には五人の側近随侍者が常在するのであって、これは、中国で成立した『禅苑清規』の内侍者、外侍者が、『勅修百丈清規』になると、内侍者が湯薬、衣鉢、外侍者が焼香、書状、請客に分化したのである（鏡島元隆博士、佐藤達玄氏、小坂機融氏『訳註禅苑清規』一六三頁）。日本においては、道元禪師は、「堂頭侍者」、「書状侍者」、「焼香侍者」、「聖僧侍者」、「衣鉢侍者」に言及しており（『日本国永平寺知事清規』、『正法眼蔵』「安居」、「永平広録」）、瑩山禪師の『瑩山和尚清規』にも、「堂頭侍者」、「焼香侍者」、「請客侍者」、「聖僧侍者」などの名称と役掌が示されている。

いま、『伝光録』を「編」した「侍者」とは、五侍者のうちの「焼香侍者」、「書状侍者」が、これに相当するであろう。試みに、『禅苑清規』

『叢林校定清規総要』、『禅林備用清規』を勅詔によって集大成した『勅修百丈清規』（一三三八成立）をみると、「焼香侍者」について、「凡そ住持の上堂、小参、普説、開室、念誦、放参、節臘、特為の通覆、相看、掛搭、焼香、行礼の記録、法語をば、焼香侍者、之を職する」（原漢文）とあり、「書状侍者」について、「凡そ住持往復の書問製作の文字をば先づ草を具て呈すべし。如し書記を闕かば山門一応の文翰をば、書状侍者之を職する」（原漢文）とある。もし、これによって類推すれば、普説、法語の記録は焼香侍者が司るのであるから、『伝光録』の「侍者」は、即ち五侍者のうち焼香侍者ということになる。もっとも、道元禪師、瑩山禪師らの日本曹洞宗初期原始僧団において、五侍者などをはじめとする諸役職の全てが完全に組織体系化していたかどうかは、必ずしも明らかでないのである。従って、正安二年（一三〇〇）当時の大乘寺には修行僧が何人安居常在していたか、五人の侍者が具備していたか、その実状は今日では全く知る手がかりがないのである。

ところで、先に、もともと『伝光録』は、「侍者」の「編」した聞書として成立したものであることを強調しておいたが、このことは、語句、文、文体を整備した仙英本のような開板本では全く不明であるが、比較的初期の写本を見れば、きわめて明瞭である。

乾坤院本を見ると、例えば、その第三章第二祖阿難陀尊者の個所で、阿難陀は、「如来ノ成道ノ夜ハ生容顔生シテ」とある。端生は端正が正しいが、生と正とが同音であるために、聞き誤って記したのであろう。また第二十一章第二十祖闍夜多尊者の個所で、「第二十祖闍夜多尊者因十

九祖示曰汝已雖信三宝（たつこ）未明業ハ從惑生（つこ）或ハ因識ニ有識ハ依不覺ニ不覺ハ依コトヲ心心ハ本清淨也」とある。三宝は、もし、この個所が『五燈会元』卷一の鳩摩羅多尊者章を典拠とし、かつ提唱の内容から判断するならば、三業でなければならぬのである。宝と業の似音によって、書き誤ったのであろう。こうしたことは、臨写や模写ではなく、聞書によって生じた誤りの未整理のままの写本を、そのまま乾坤院本が書写したに相違ないことは、すでに指摘しておいたとおりである（拙著『乾坤院本伝光録』解題）。

次に、提唱の時期であるが、先に掲げた巻頭文によって『伝光録』は正安二年正月十一日から開始された請益であると知られる。正安二年とは、瑩山禪師三十三歳、立僧すなわち首座となった歳で、首座は住持主人に代って法務を代行する（『洞谷記』）のである。正月十一日の請益は、『瑩山和尚清規』月中行事第二の正月十一日の項に、「請益作法」が詳述してある。

十一日。請益。請益の法は、斎罷、侍者、維那に報じて、請益の牌を掛く。

晩間に、方丈の版を鳴らすこと三会すれば、大衆、威儀を具足して、おのおの方丈に上る。法堂の西の鼓を鳴らすこと長打一会す。小参の鼓の如し。大衆、おのおの当面に焼香す。或ひは兩人、或ひは三人、焼香して、次第に当面に、排立す。首座、進みて当面に問訊して、禅床角頭を望んで、曲躬問訊し又手して云く。「某甲等、生死の事、大にして、無常、迅速なり、伏して望むらくは、和尚、慈悲もて、因縁

を開示したまへ」と。主人、黙許して、下座して、大衆と礼三拝し、坐具を収めて、又手し、曲躬して云く。「たまたま、請命に応じて、宗風を汚すことあり、仰いで曩祖に慙ぢ、伏して大衆に愧ず」と云ふて、上牀すれば、首座、禅床角頭に来りて、因縁を挙す。主人、挙拈して、説破下語して、下座す。首座、当面に帰りて謝拝す。三拝或ひは六拝、時に随ふ。次々に焼香してのちに、排立して次第に当面問訊して、禅床角頭に来りて、まず下語す。下語し畢りて、西辺に群立す。また、首座、前の如く請すれば、主人、前の如く聴許す。礼儀、前の如し、

一六の請益は、永平の古儀なり、当山には、三一にこれを行ふ（原漢文）

これによってみれば、請益とは、斎罷に、維那が請益の牌を掛け、大衆は、晩間に、威儀を具して、方丈に上り、一定の作法のもとに、法益を請うことであり、これは、永平寺では、毎月、一、六、一一、一六、二一、二六日の六回にわたって行われ、当山すなわち永光寺では、一、三、一一、一三、二一、二三日に行なうというのである。無論、大乗寺の場合も、これに準ずるであろう。もっとも、『瑩山和尚清規』日中行事正月の条をみると、

六日、異なる行法なし、若しは請益あり、

十一日、請益、

廿一日、請益、

とあって、一、三の日ではなく、永平寺の寺規による一、六の日、主と

して、一一、二一の日に行っていることは注意されなければならない。そして、「請益」は、未の刻の、一般講義に相当する「法益」の後、これに対する個人指導としての「請益」なのであろう。

請益は、右によれば、晩間に行われるのである。(第三十四章・第卅三祖大鑑禪師の章の末尾に、「若真実ニ此処ニ精到セント思量夜徒不捨身心妄ニ運ハサルヘシ」(乾坤院本)とある。この「量夜」とは、はじめ「晩間」の意かとも推量したが、思うに、これは、昼夜の誤写であらう。即ち、昼夜を徒らに捨てず、身心を妄りに運ばざるべしの教誡であらう。)しかし、乾坤院本によれば、「今朝又因縁ヲ説破スルニ更早頌アリ」(第七章)、「今朝此因縁ヲ説破セントスルニ早頌アリ」(第九章)、「今朝又此因縁指説セントスルニ早語アリ」(第一〇章)、「今朝又此因縁ヲ会セントスルニカタシケナク早語ヲ以ス」(第十一章)、「今朝又此因縁ニヨリテ早語ヲ付ント思」(第十四章)、「今朝又這ケ因縁ヲ指注スル」(第二十五章)とあり、また、「今日大乘児孫ヲ雲外ニ尋言ヲ青天ニツケント思」(第一章)、「今日又早語ヲ着適来因縁ヲ挙セント思」(第八章)、「今日又恁麼ノ道理ヲ指説ン」(第一章)、「今日適来因縁挙揚スル」(第二三章)、「今日適来因縁挙揚スル」(第五章)、「今日若尽劫セスンハ何時ヲカ待ン」(第十七章)、「今日又早語アリ」(第二〇章)など、「今朝」「今日」の語がある。してみれば、『伝光録』の提唱は、原則どおり晩間に行われたが、時には朝、日中の時分に行われたこともあったと推測されるのである。しかも、「ツキノ請益ノ日ヲ以下語説道理スヘシ」(第一章)とあるから、それは、一日に一度が限度であったのであろう。

しからば、『伝光録』の提唱は、正安二年正月十一日朝に開始され、いつごろ完了したかという問題である。

一、六あるいは一、三の請益が忠実に機械的に行われたと仮定すれば一ヶ月六回となる。冬安居、夏安居あわせて六ヶ月とすれば、この間三六回の請益、提唱となる。『伝光録』は五三章から成り立っているが、一日一回の請益で各一章づつを提唱したとなると、五三日間を要する。第三十四章第卅三祖大鑑禪師のところに、「然今夏九十日横説堅説古今ヲ比判シ麁言軟言仏祖ヲ指注ス(中略)初秋夏末既或東或西時節ニアタリ」(乾坤院本)とある。これが時期ないし期間を示す僅かな手がかりである。「今夏九十日」と言うのは、四月十六日から七月十五日に至る九十日の夏安居期間を指す。さきに正月十一日というのは、十月十六日から一月十五日までの九十日の冬安居のなかの一日を指す。従って、巻頭第一章釈迦牟尼仏の提唱が、正安二年の正月十一日になされ、その後三ヶ月以上の空白期間がおかれ、四月十六日からじまった正安二年の夏安居の七月十四、五日頃に、第二章から第三十四章までの提唱が終了したことを、右の語は暗示していると理解できる。してみると、二、三日毎に一章を提唱するという速度になる。そこで第三十五章から第五十三章までは、更に三ヶ月あまりのちの正安二年十月十六日から正安三年一月十五日までの冬安居中に提唱されたという計算になる。

右は、一日一章、一ヶ月六回の請益を、正安二年の冬居、夏安居、正安二年から同三年にかけての冬安居のそれぞれ九十日間に配分した原則論にもとずいた仮説であって、その正確な実態は割り出せないのである。

る。あくまでも、およその見当である。

次に提唱の場所であるが、乾坤院本に、「今日大乘ノ児孫ヲ雲外ニ尋言ヲ青天ニツケント思」(第一章)とあり、「今日大乘子孫又恁麼道理指説セントスルニ早語アリ」(第二章)、「今日大乘遠孫又着ント語ヲ思」(第三章)、「当寺老和尚价公マノアタリ彼嫡子トシテ法幢ヲ此処ニ立テ宗風ヲ当林ニ挙ク」(第五章)とあるところによって、「老和尚(東堂の意を含むか) 義价(介)和尚のいる「大乘」寺であることが理解される。義介(价)は、永平寺第三代を退位して、加賀に大乘寺を開いたほかは、どの寺にも居住していないのである。

ところが、先に掲げたように諸写本の書名のなかには、「大乘二世瑩山紹瑾大和尚伝光録」のほかに、「紹瑾大和尚住能州洞谷山永光寺語録」となすものがある。『伝光録』提唱の時期、場所からして、それは『大乘二世瑩山紹瑾大和尚伝光録』が適わしく、『紹瑾大和尚住能州洞谷山永光寺語録』は穏当ではない筈である。この書名は、誰によって、いつ冠せられたものか、現段階では、両書名の隔たりを埋める資料がない。思うに、当初、『伝光録』は侍者によって確かに大乘寺で聞き書きされたのではあるが、のちに永光寺において、これが再びある程度、不十分ながらも、清書され整理された。その時に誤まって、洞谷山永光寺の語録と安名してしまったのではないか。しかし、更に、後の書写者は、この安名の誤りに気付いて、大乘二世の伝光録と改めたのであろう。(未完)